
俺とブルーとポケモンと。

那家乃ふゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とブルーとポケモンと。

【Nコード】

N9430S

【作者名】

那家乃ふゆい

【あらすじ】

転生者である主人公……タケルは、今日も今日とて、相棒のブルーと共におもしろおかしく旅を続ける。多分マトモな人なんていないだろうけど、夢のカイオーガをゲットするまでタケルは諦めない！ パートナーのプリンや幼なじみポケモンのマタドガスも活躍……の予定！

ポケモンの二次創作です。よかつたら読んでくれると嬉しいな！

プロローグ(前書き)

はじめまして。ポケモンを書いてみました。
これからよろしくお願ひします。

プロローグ

雲一つない満点の青空の下で、俺はゴロンと草むらに仰向けに寝そべっていた。

近くではポツポの群れが、親であるピジヨットに空の飛び方を教わっている。

既に二時間が経過しており、ほぼ全てのポツポが、初めての空を満喫している。……が、ただ一匹だけ、未だに悪戦苦闘しているヤツがいた。

必死に両方の翼を羽ばたかせているが、左右のテンポがバラバラなのでなかなか飛び立つことができない。ピジヨットも半ば諦めかけそうな顔をしている。

……と、そこに一匹のポツポが空から降りてきた。模様から察するに、一番最初に空へと上がった個体である。

そいつは、例のポツポのところに行くのと、手本を見せるかのよう
に、ゆっくりと翼を動かし始めた。分かりやすいように、理解しやすいように、決して急がず丁寧に。

最後のポツポが、ソイツの動きを真似し始めた。ぎこちないながらも、懸命に羽を一緒に動かしていく。

それが十分ぐらい続いただろうか、やっと、全てのポツポが大空へと飛び立っていった。全員が、ソイツに祝福の声を贈っている。

彼らはこれから、一匹のポケモンとしてこの世界で生きていかなければならない。親の庇護の下にあった今までは違って、全てのことを一人でやっていかなければならないのだ。

様々な困難が待ち受けているだろう。もしかしたら、後二時間もしれば、この世から消えているヤツもいるかもしれない。

それでも、彼らは全力で生きていくだろう。限りある人生……もとい、ポケ生を最高のものにするために。

「たあけるう、そろそろ出発しようよー！」

三年間、共に旅をしてきた相棒が、俺を呼ぶ声が聞こえた。ゆっくりと体を起こし、相棒の方を見る。

彼女は、穏やかに吹く風に、長い黒髪をなびかせながら、俺に手を振っていた。

「ああ、今行くよ」

ついさっきまでいたポツポ達は、もういない。全員が、自分自身の旅を始めたのだ。

そこに唯一残っていた、あのポツポの羽を拾い上げ、空中に放す。それは、風に乗る、遙か彼方へと飛んで行った。

「俺がこの世界に転生してから、もう十五年か……」

俺の呟きは、誰にも聞かれることなく、風に攫われていった。

俺は、転生者だ。

しかし、別に前世で神様が同情するような死に方をして転生させられたわけでもないし、何かおかしい存在に送られたわけでもない。

気が付いたら、転生していたのだ。

最初の頃は、マジで焦った。何が焦ったってそりゃ……赤ん坊の頃だろう。

いくら肉体年齢が幼児と言っても、精神年齢は思春期のそれである。

母乳飲まされるときとか、おしめを取り換えられるときとかは、冗談抜きで顔から火が出るかと思った。

七歳になり、俺は近所に住んでいる同い年の子供たちと一緒に遊ぶようになった。

彼らの名前はそれぞれ『レッド』『グリーン』『ブルー』だ。ぶっちゃけて言うなら、レッドがFR、LGの男主人公。グリーンがライバル。ブルーが女主人公である。どうやら、俺が生まれたのは、カントー地方に位置するマサラタウンのようだ。

うん。やっぱりここが王道だね。ホウエンとかシンオウもいいと思うけど、個人的にはカントーがベスト。

そして、十二歳になると、俺たち四人は、マサラタウンに住んでいる、ある博士の下に呼ばれた。皆さんご存知オーキド博士である。そこからは原作通り、おなじみの御三家の中から、パートナーとなるポケモンを選んでいった。

「僕はこれにするかな」

「俺はこっちだ」

「私はこれだね」

三人が選んだポケモンを説明させてもらう。

レッドはフシギダネを選んだ。草・毒タイプで、平均的なステータスを持っているポケモンだ。

グリーンはヒトカゲ。炎タイプで、攻撃と特攻が高い。

ブルーはゼニガメ。水ポケモンで、防御と特防が高い。

三人は、それぞれのポケモンをボールから出して、喜び合っている。

ここで、俺は一つ大事なことに気が付いた。

御三家、と言われていることから分かるように、ポケモンは三匹。しかし、俺たちは四人だ。

……あれ？俺のポケモンって……？

「あ、あのう……博士？俺のポケモンは……？」

恐る恐る聞いてみる。ま、まだ救済策としてピカチュウがいるはずだ。ピカチュウならまだセーフ。主人公格だし、技がカッコいい。博士は、俺に穏やかに微笑みかける。

「心配せんでも、ちゃんとう意しておるよ」

そう言っつて、机の上に置いてあったモンスターボールを俺に渡した。

三人が興味津々という様子で見ている中、俺はポケモンをボールから出す。

ピンク色で風船のように丸い体。頭には、特徴的なでっぱりが付いている。くりくりとした、愛らしい目が、俺を見つめていた。

「……………え？」

思わず、絶句する。

このポケモン……………まさか……………。

「タケルよ、お前のポケモンはコイツ……ふうせんポケモンの、プリンじゃ」

プリン、だと……？

他の三人が圧倒的人気を誇るカントー御三家であるのに対して、俺はマイナーもいいところの、プリン？

「博士……すいませんがこれは……」

遠慮します、そう言おうとした時だった。

「ぷぷう！」

何を思ったのか知らないが、プリンが俺の胸の中に飛び込んできたのだ。

条件反射で受け止める。

プリンは、俺に抱かれた状態で、気持ちよさそうに目を細めていた。

「ぷぷ、りいん……」

その瞬間、俺の中で何かが弾けた。

「か……可愛ええええええええええええええええつ！！」

なにこの可愛い生物は！？丸っこい体を十分に生かした小動物的な魅力。鳴き声の「ぷぷ」がもうなんともいえないプリチャーさを醸し出している。

俺の答えは決まった。

「博士、コイツにします！」

高らかに宣言した！

御三家がなんだ！ 伝説がなんだ！ 幻がなんだっていうんだあああああああつ！！

そいつらにこいつのような可愛さがあるのか？ キュートさがあるのか？ 癒し効果が存在してんのか！？

やってやる。俺はこいつと一緒に旅に出て、人生を謳歌してやるぜ！

そして、俺たちはマサラタウンの出口に集合していた。

これからは四人バラバラで旅をしていくのだ。もしかしたらもう二度と会えなくなるかもしれない。

俺たちは、そこで一つの約束を交わした。

『これから先、どんなことがあっても、俺たちのことを絶対に忘れるな』

ポケモンマスター、ポケモンブリーダーと、それぞれの夢を言い合い、誓った。

いつか必ず、この町で再会すると……。

そして、俺たちは世界へと足を踏み出したのだった。

「タケル！」

マサラを出て五分くらいしたところで、後ろから声をかけられた。誰？　と思い振り向く。そこには走ってきて軽く息が上がっている、ブルーがいた。

「ありゃ、ブルー。どうしたのさ？　俺になんか用でも？」

まだ別れてから全くといっていいほど時間が経っていないのだが、なぜか俺を追いかけてきた。

ブルーは、わずかに顔を赤らめながら、ややヤケクソ気味に叫ぶ。

「わ、私は……アンタと一緒に旅をしたいの！」

「……は？」

突然の宣言に思わず聞き返す。急に何を言っとするのかね、この子は。

「お前、正気か？」

「あ、当たり前でしょ！　私はアンタと一緒に旅に出る！　……なんか文句でもある？」

「……まあ、いいんじゃないの？　女の子の一人旅は危ないしな」

さすがに危険だと感じての行動だろう。ま、一人寂しくの旅よりはいくらかマシだし。

ブルーが俺の横に並ぶ。なぜか少しだけ嬉しそうな顔をしていたが、あえて触れないようにした。

「な、なによ？」

「んじゃ、別に」

ブルーの女の子らしい仕草に、笑みが零れる。ブルーは、笑う俺に首を傾げながらも、「いくわよー」と言って歩き始めた。
俺もその後へと続いた。

これが、三年前、俺が初めてポケモンを持ち、相棒のブルーと旅に出た時の話である。

「なに笑ってんの？ タケル」

俺の隣で、野生のマダツボミと遊んでいたブルーが可愛らしく首を傾げる。こいつも、三年間で随分と女らしくなったな。

俺は自然な笑みを浮かべた。

「いや、なんとなくーく昔のことを思い出していたのさ」

「ふーん……ま、いいけど」

よいしょ、とブルーが立ち上がる。

俺も、バッグを担いでそれに続いた。

「んじゃ、出発しますか！」

「ああ」

二人で並んで歩きだす。

これから向かう先はホウエン地方。

そこには様々な困難があるだろう。

アクア団、マグマ団の二大組織に、大陸創生伝説。コンテスト制
覇もしたいな。

なんか原作知識が役立つ機会があるだろうか。いや、なくても別に構わないけど。

俺たちは、これから先の冒険を頭に思い浮かべながら、ホウエン
行きの港へと足を進めた。

プロローグ（後書き）

感想、待っています。

オリジナルキャラクター紹介【カントー地方】（前書き）

こんにちは。カメックスを頑張って育てているふゆいです。

皆さんに質問なのですが、このカメのおすすめ技ってなんかないですかね？

よかったら教えてくれると嬉しいです。

オリジナルキャラクター紹介【カントー地方】

主人公

名前：タケル

性別：男

年齢：十五歳

身長：165cm

体重：55kg

格好：白の模様付長袖Tシャツに紫のジャケット、下は一般的なジーンズ。生まれつき目が悪いのでコンタクトを付けている。たまにメガネ

出身：カントー地方、マサラタウン

補足：転生者。気が付いたらポケモンの世界に転生していた。オーキドから貰ったププリンを返却しようとしたが、ププリンの可愛さに悩殺。一転してパートナーに。旅に出た直後、なぜか自分を追いかけてきたブルーと一緒に旅をすることになった。基本的にはバトルを好まないが、ポケモンの強さは上位。三年間の間で目立つような戦績はあまりないが、カントーリーグ準優勝の経歴を持つ（優勝はレッド）。基本的にはツッコミだが、ボケに回ってしまうこともしばしば。モットーは『重要なのはバトルに勝つことではなくポケモンとの絆を深めること』

パートナーポケモン：ププリン プリン

幼馴染ポケモン：ドガース マタドガス

【手持ち】

名前：プリン（ぷーちゃん）

性別：

名前：カメックス（かめつち）
性別：

名前：マタドガス（ドガくん）
性別：

名前：ルギア（るぎうち）
性別：不明

名前：ウツボット（つぼみん）
性別：

ヒロイン

名前：ブルー

性別：女

年齢：十五歳

身長：155cm

体重：46kg

格好：FR、LGの女主人公の帽子なし服装に、水色のジャケットを着ている。タケルを真似て、ときどき伊達メガネをつけている

出身：カントー地方、マサラタウン

補足：タケルの幼馴染。マサラにいた時は、ボーイッシュであまり周りを気にしていなかったが、タケルとの旅の中で女の子らしくなった。かわいいポケモンが大好きで、タケルのプリンがその毒牙

にかかるともしばしば。カントーリーグ第四位。
パートナーポケモン：ゼニガメ カメックス
幼馴染ポケモン：プリン

【手持ち】

名前：カメックス（カメちゃん）

性別：

名前：ピッピ（ピッくん）

性別：

名前：ニドリーナ（ニドちゃん）

性別：

名前：プリン（ぷりり）

性別：

名前：キングドラ（タッちゃん）

性別：

名前：メタちゃん（メタモン）

性別：不明

キャラ

名前：レッド

性別：男

年齢：十五歳

身長：170cm

体重：60kg

格好：FR、LGの主人公の服装。両手の指出し手袋は必需品！
出身：カントー地方、マサラタウン

補足：タケルの幼馴染。勝ち気な性格だが一人称は『僕』。ポケモンマスターを目指すためにマサラから旅立った。カントーリーグでは、タケルとの熱戦の末に優勝し、チャンピオンの称号を手に入れた。原作ではシロガネ山に引き籠っていたが、今作ではイエローと共にあちこちを放浪している。旅の途中で、ロケット団によって改造され、自在に進化できる能力を持つイーブイを保護、仲間になっている。『なみのり』の手立てが無かったため、ハナダジムリーダーのカスミからギャラドスを貰った。以前まではピカチュウを持っていたが、トキワシテイで出会ったイエローに譲り渡している。
パートナーポケモン：フシギダネ フシギバナ
幼馴染ポケモン：ニョロモ ニョロゾ

【手持ち】

名前：フシギバナ（フッシー）

性別：

名前：ニョロボン（ニョロ）

性別：

名前：カビゴン（ゴン）

性別：

名前：プテラ（プテ）

性別：

名前：ギャラドス（ギャラ）

性別：

名前：イーブイ（ブイ）

性別：

名前：グリーン

性別：男

年齢：十五歳

身長：172cm

体重：62kg

格好：FR、LGのライバルとアニメ版シゲルを足して÷2した格好。祖父であるオーキドからもらった、リフレクター付きのペンダントを首から提げている。

出身：カントー地方、マサラタウン

補足：タケルの幼馴染。祖父が世界的なポケモンの権威であるオー

キド博士のため、ポケモンに関する知識は専門家さえも唸らせるほど。カントーリーグにおいて、レッドに敗れるも、三位決定戦でブルーに勝利し、第三位となる。

パートナーポケモン：ヒトカゲ リザードン
幼馴染ポケモン：ストライク ハッサム

【手持ち】

名前：リザードン

性別：

名前：ゴルダック

性別：

名前：ハッサム

性別：

名前：ピジヨット

性別：

名前：キュウコン

性別：

名前：ポリゴン2

性別：不明

名前：イエロー

性別：女

年齢：十四歳

身長：152cm

体重：43kg

格好：『ポケスペ』のイエローの格好。もちろん麦わら帽子も装着。
出身：カントー地方、トキワシティ

補足：『ポケスペ』通り、ポケモンの傷を癒し、心を読み取ることが
できる。趣味は釣りで、水辺があるところでは必ず取っていいほ
ど釣りをする。勿論『すごいつりざお』。レッドからもらったピカ
チュウがパートナー。レッドにとっても懐いており、一緒に旅をして
いる。今は師匠と弟子のような関係だが、いつかは……な思春期真
っ盛りなおにゃのこ。ニビジムリーダー、タケシとハナダジムリ
ダー、カスミからそれぞれゴローンとオムナイトを貰った。

パートナーポケモン：ピカチュウ

幼馴染ポケモン：コラッタ ラッタ

【手持ち】

名前：ピカチュウ（ピカ）

性別：

名前：バタフリー（ピーすけ）
性別：

名前：ラッタ（ラッチャん）
性別：

名前：ドードリオ（ドドすけ）
性別：

名前：ゴローニャ（ゴロすけ）
性別：

名前：オムスター（オムすけ）
性別：

オリジナルキャラクター紹介【カントー地方】（後書き）

今回は人物紹介でした。

基本的には『ポケスペ』と同じプロフィールですが、少しアレンジを加えました。ブルーにブルーなんて似合わない！
今日中にもう一話更新できるかな……？

第一話 初めてのハウエン地方（前書き）

こんにちは。カメールのレベルがなかなか上がらないことにやや焦っているふゆいです。

やっと本編ですね。お待ちせいたしました。

それでは早速参りましょう。第一話です。

第一話 初めてのホウエン地方

クチバシティから出る定期船に乗って、約五時間。

俺たちは船のデッキに上がり、目的地に着くまでの暇つぶしにと二人でポケモンバトルをしていた。

お互いの残りポケモンは一体。

周りには、観戦者がぞろぞろと集まってきていた。まあ、俺たちがあまりに有名人なのが原因だろうが。

一年前に行われたカントーポケモンリーグにおいて、俺とブルーはそれぞれ、二位と四位という結果を残しているのだ。

その二人が、こうしてバトルをしているのである。ポケモンファンなら誰もが興味をそそられるだろう。

「ふう……さあて、最後の大一番といきますか？」

「生意気な口叩けるのも今のうちだっていうことを思い知らせてあげるわ！」

「そりゃ楽しみだ。……いけっ、ぷーちゃん！」

「カメちゃん、Lead y Go！」

お互いのラストポケモンがフィールドに出現する。

俺もブルーも、結局はパートナーを最後に残していた。

俺の場にいるのは、ふうせんポケモンのプリン。あのキュートなプリンが進化した姿である。プリンよりも丸っこいため、俺的には最高のポケモンだ。やわらかいし。

ブルーのポケモンは、こうらポケモンのカメックス。コイツも、オーキド博士から貰ったゼニガメが進化した。背中の甲羅から出ているポンプ（通称、ハイドロキヤノン）が特徴的だ。ちなみに余談だが、カメールがカメックスに進化した際、ブルーは膝から崩れ落

ちていた。(なんでも、「可愛かった私のカメちゃん
!」だそうだ)

「いくわよ! カメちゃん、アクアジェット!」

先手を取ったカメックスが、水しぶきを上げながらぷーちゃんへと突っ込んでくる。このアクアジェットだが、本来はシンオウ地方で覚える技であるため、普通は覚えることができない。しかし、ブルーに、なにか先手を取れる技を教えてくださいとせがまれたので、仕方なく教えた。アニメでサトシ君のブイゼルが意気揚々と使っていたのが印象的である。

「おっと、のんびりしている場合じゃなかったな。ぷーちゃん、まるくなる!」

「ぷりっ!」

ぷーちゃんが、元々丸い体を更に丸める。これでぷーちゃんの防御力は一段階上昇した。アクアジェットは物理攻撃であるため、こうしておけばかなりのダメージを軽減できるのだ。

カメックスとぷーちゃんが衝突する。案の定、ぷーちゃんはそのまでのダメージを負うことなく、平然としていた。

そもそも、プリン自体の種族値において、体力はずば抜けているのだ。しかも、努力値はほぼ体力と防御に振られている。そんな壁みたいなポケモンがそう簡単にやられるかっての。

「よし! ぷーちゃん、反撃行くぞ! うたう攻撃!」

「ぷっ!」

ぷーちゃんに向かって、マイクを投げ渡す。そう、皆さんご存知アニメ版プリンのアレだ。

「ぷ〜ぷりぷ〜ぷうぷり、ぷ〜」

ぷーちゃんがマイク片手に歌う。あの人間の能力を遥かに凌駕したサトシ君でさえ眠りに落ちた技だ。カメックスが眠らないわけがない。

「ガ、メ……〜zzzz」

「ああっ！ カメちゃん！？」

狙い通り、船を漕ぎ出したカメックス。よし、詰んだ。

「とどめだ！ ぷーちゃん、ゆめくい！」

「ぷ〜り〜！！」

ぷーちゃんのゆめくいがカメックスを襲う。

眠っているカメックスがそれを避けられるはずもなく……。

「ガメ〜……」

「カメちゃん！」

ドスンという音と共に、甲板へと崩れ落ちた。

「カメックス、戦闘不能。ブルー選手の手持ちがゼロとなったため、タケル選手の勝利です！」

「よっしやー！」

グッとガッツポーズを決める。最後の一匹まで減らされた時は流石に焦ったが、まあ結果オーライだ。

「むう〜……少しぐらい手加減してくれたっていいじゃない……」
「いや、そんなことしてたらこっちが負けるから」

ブルーが頬を膨らませながら近寄ってくる。俺はそんな彼女に苦笑いしながらも、軽く頭を撫でた。こいつはなぜかこうすると機嫌が良くなるので、俺の必殺技となっている。

「うう……まあ、いいわよ。でも、ホント惜しかった」

「だな。お前最初のキングドラが強すぎるんだよ」

「だって、ドラゴンタイプよ？ 強いに決まってるじゃない」

「そう言っ問題じゃないだろう……」

そんな馬鹿話をしていると、急に汽笛が鳴り響いた。どうやら目的地に到着したようである。

「うわぁ……！」

ブルーが、手すりから身を乗り出して、外の光景に目を輝かせる。目の前に見える街並みが、余程珍しいのだろう。

「やっと着いたな……ハウエン地方」

ここは、ハウエンでも有数の船町、カインシティだ。

「うくん……やっと船から降りられた〜！」

「そんなに嫌だったのか……？」

ブルーは、船から降りた途端、両手を空に向かって伸ばし、リラックスしていた。

俺はその行動にやや苦笑する。

「それにしても、暑いわねえ………」

「ああ。ま、南国だからな」

ホウエン地方は方位でいうと南に位置している。現実世界でいえば九州地方だ。というか、この地形はまんま九州だし。

そのため、東にあるカントー地方に比べると、平均気温が少しばかり高い。しかも、ここ『カйнаシティ』は、その中でも南の方にあるので更に暑いのだ。

せっかくホウエン地方に来たので、俺たちは探検がてらのシヨッピングに出かけることにした。

「あっ………」

と、一つの店の前で、ブルーが足を止めた。なにかを食い入るよう見つめている。

なんだ？ なにか欲しいものでもあったのだろうか。

「どうしたんだ？ ブルー」

「えっ？ いや、その……あの帽子、ちょっと可愛いなあなんて……さ、あはは……」

苦笑いのブルーが指差した先には、白い帽子があった。

モンスタールポールを模った模様があしらわれていて、それが白と赤のコントラストを醸し出している。というか、あの帽子ってFR、LGの女主人公の帽子じゃん。

「うん……」

「……買ってやるのか？」

「!？」

いつまでも離れようとしないブルーに、そう切り出してみる。幸い、金なら結構余っているし、何より、この暑さだ。熱中症になられても困る。

ブルーはしばらく遠慮していたものの、結局、俺の言葉に甘えて買ってもらうことになった。

「えへへ……」

隣では、新調した帽子を早速被り、上機嫌になっている相棒がいる。

「ね、可愛い？ 似合っているかな？」

「ん？ ああ、良いんじゃないか？ 可愛いぞ」

「っ！ え、えへへ……」

俺の言葉に、なぜか顔を真っ赤にしてにやけているブルー。太陽の暑さの影響でも出ているのだろうか。

不思議に思いながらも、ブルーの反応を見て楽しんでいた。……

そんなときだった。

「うわっ！」

「きゃっ！」

前を見ていなかったために、歩いてきた男女二人組と衝突してしまっただ。

第一話 初めてのホウエン地方（後書き）

感想、待ってます。

第二話 ミーハー主人公（前書き）

こんにちは。連休最終日にまで小説書いてる、ふゆいです。

四日間続いた連続投稿も、今日で途絶えると思います。なぜなら学校があるんだよおおおおお！！

……コホン。

今回はなんとあの二人の登場です。

懐かしいですね、アドバンスで初めてポケモンをしたあの日の思い出が蘇ってきましたよ。

それでは第二話です。

第二話 ミーハー主人公

「す、すまん！ 大丈夫か？」

「は、はい……」

「大丈夫です……あれ？」

二人組の男の方が俺の顔をまじまじと見つめてくる。あれ？ この格好どっかで見たような……。

「も、もしかして、マサラタウンのタケルさんですか？」

「え？ あー、うん、そうだよ」

「ほ、本当ですか！ 僕、タケルさんの大ファンなんです！」

「あ、ああ……」

興奮した様子を見せる少年。……あ、思い出した。

特徴的な帽子に、黒を基調にした服。

少女の方も、スカーフを頭に巻いていて、赤い服にスパッツという格好。

こいつら……『ルビ・サファ』の主人公だ。

「ぼ、僕、ルビーっていいいます！ ほら、君も挨拶して！」

「え？ あ、うん。サファイアです。どうも」

ペコリ、と頭を下げて自己紹介をする二人……ルビーとサファイア。

まあ、ハウエン地方なんだからいつかは会うんじゃないかとは思っていたが……まさか初っ端から出くわすとは。

「なに？ どうしたの、タケル」

「……………え？」

一人取り残されていたブルーが、話に入ってくる。
ブルーが現れた途端、さっきまで無表情だったサファイアが、目を輝かせながら近寄ってきた。

「ぶ、ブルーさんですよね!？」

「う、うん。そうだけど……………」

「やっぱり! わ、感動かも!」

「は、はあ……………」

突然のことに、呆然とするブルー。

なんでこの地方の主人公はこんなにミスターなんだ……………?

予想外の展開に目を白黒させている俺たちをよそに、二人は手を取り合って喜んでいた。

「そ、そういえば……………どうしてタケルさんたちがハウエン地方にいるんですか? 僕が言うのも何ですけど、これといって珍しいものも無いですよ?」

わからない、と言って首を傾げるルビー。っていうか、俺たちがここにいるのがそんなに不思議なのか……………?

まあ、別に隠す必要もないので、普通に返した。

「別に、ただの観光さ」

「あ、新婚旅行ですか?」

『ぶっ!』

サファイアのいきなりの発言に、二人して吹いた。

隣では、相棒が顔を真っ赤にして「な、な、な……………!」と声にな

らない叫びをあげている。
俺も、なんだか顔が熱い。

「ゴホツ、ゴホツ……き、急になにを言い出すんだ！」

「え？ 違うんですか？」

「わ、私とタケルは、そ、そんな関係じゃ……」

「えー、お似合いだと思っただけだなあ」

「お似合いだとかそういう問題じゃないだろ！？ 大体、ブルーみたいな可愛い女の子に、俺が釣り合うわけないだろうが！」

『……………はあ』

二人してため息をつくThe 主人公ズ。は？ なんてそんな反応を？

「……………鈍感とはこのことだね」

「……………うん。ちょっと前まではルビーもあんな感じだったけど」

「ん？ なんか言ったか？」

『なんでもありません』

「ふうん……………で、もう用がないなら、俺たちはもう行っていいか？ いろいろと行きたいところがあるんだよ」

俺がぶつかったのが原因なのだが、そんなことはもはや遠い記憶の果てに投げ捨てられているようだ。

このままここにいてもはつきりいつて仕方がないので、俺は話を切り上げようとした。

「ちよっ、ちよっと待ってください！」

しかし、ルビーが先へ進もうとした俺たちを止める。

俺は気付かれないように小さくため息をつきながら、ルビーへと

向き直った。

「なに？ まだなんか用でも？」

「あ、あの！ ……僕たちと、ポケモンバトルをしてほしいんです！」

「……は？」

ルビーのいきなりの宣戦布告に、思わず目が点になる。ポケモンバトル？ コイツ、俺とブルーがどういうヤツか知ってるんじゃないのか？

ルビーは、拳を握りしめながら、俺の目を見て叫んだ。

「僕たちは、今、アクア団とマグマ団っていう悪いヤツらを追っています。そいつらは、ポケモンを使って悪いことをするんです。僕たちはそれを止めるために戦わなければならない！ ……だから、確かめたいんです。今の僕たちの力がどこまで通用するのかということ！」

「あたしからも、お願いします！ タケルさんやブルーさんと戦って、自分の実力を知りたいんです！」

「……………」

ブルーと顔を見合わせる。

はつきり言って、アクア団とマグマ団は強敵だ。特にボスのアオギリとマツブサ。ゲームでは、サメハダーやバクーダを主に使っていたが、ここでも同じかどうかわからない。実力だって、おそらく原作とは違うだろう。

この子たちは、二つの組織と戦っていると言った。ということは、今までも何度か接触しているのだろう。

一人の先輩としては、止めるべきなのかもしれない。まだ子供なのに危ない橋を渡ろうとしているのだから。

しかし

「……はあ。オーケー、分かった。バトルしてやんよ」

「うん。貴方たちのその気持ちは、私たちにもよく分かるから」

俺たちは承諾した。

思い出したのだ。一年ほど前に、ロケット団と戦ったときのことを。

そのころの俺たちは、レッドとグリーンを含めて、全員が未熟だった。自分の力量を見誤り、格上の幹部相手に全く歯が立たず、意気消沈していた時期もあった。

だから、彼らの気持ちが痛いほど分かるからこそ、手を貸してあげたいと思ったのだ。

「ほ、本当ですか!」

「ありがとうございます!」

地面にぶち当たるのではないかと思うぐらい、頭を下げる二人。

……はあ。転生する前は『アクア団とかめんどくせえ……』とか思ってたんだろうけどなあ。いつからこんなに優しくなったのかね、俺は。……まあ、十中八九、隣で苦笑いしているコイツのおかげだろうが。

「じゃあ、その草むらに行こうか。周りに被害が出ないところがいいからな」

「は、はい! よろしくお願いします!」

「言っておくけど、手加減はしないわよ? 貴方たちも、私たちがどういう実力を持ったトレーナーか、知っているんでしょう? 相手がどんな相手でも全力で相手するのが、私たちの信条。それを承知できるわよね?」

「も、もちろんです！ 本気でやってもらってこそ、あたしたちの本当の実力がわかるんですから！」

うん。真つすぐで芯の強い、いい子たちだ。

さあて、主人公キャラであるこの子たちは、一体どんなバトルを見せてくれるのかねえ。実に楽しみだ。

第二話 ミーハー主人公（後書き）

感想、待ってます。

サファイアの口調は、ポケスペ通りか公用語か、どっちの方がいいでしょうか？

第三話 VSルビィ&サファイア？（前書き）

久しぶりです。

学校が忙しくて更新がなかなかできませんでした。

これからはたまにの更新になると思うので、ご了承ください。

五月二十八日、マジカルリーフをはっぱカッターに訂正しました。

第三話 VSルビー&サファイア？

さて。今の状況を説明しよう。

俺とブルーは、ルビーとサファイアの相手をするために、カイナシティを出て、110番道路に来ている。

後輩二人は、緊張の面持ちで俺たちを見ていた。

そんなに緊張する必要もないだろ……。

「じゃあ、ルールを説明するぞ。使用ポケモンはお互いに三体ずつのマルチバトルとする。持たせる道具の重複は不可。戦闘不能になった場合は速やかにポケモンを退避させること。先に戦闘可能なポケモンがゼロになった方の負けだ。……異存はないな？」

『はい！』

「このバトルで、貴方たちは色んな新しいことに出会おうと思っただから、そこで忘れずに、しっかりと学びなさい。それが今、貴方たちを強くする、最も効果的な方法だから」

『はい！ 分かりました！』

うん。いい返事だ。若いつていいねえ（笑）

腰のベルトに付けているモンスターボールに手を伸ばす。

よし。まずはお前に行ってもらおうぜ……。

「それじゃあ、試合開始！ ……いけっ！ かめっち！」

「カメちゃん、Lead y Go！」

俺たちの前に、二体のカメックスが出現する。こいつはブルーから貰った卵が孵ったヤツだ。そのせいかなかなか戦闘力を持っている。

さあて、向こうは何を出してくるかな？

「頼んだよ、COCO!」

「お願い、とろろ!」

二人が出したのは、エネコロロとトロピウスだ。

なんか、この世界の人たちって、猛烈に?ポケスペ”の影響受けてるよなあ……。

「COCO、うたう攻撃!」

先手を取ったエネコロロがかめつちたちを眠らせにかかる。

うん、いい戦い方だ。最初に相手の動きを止めて、自分のペースに持ち込む。ポケモンバトルの鉄則だ。

でもまあ……そんな基本じゃ俺たちは倒せないけどな!

「かめつち、からにこもる!」

「こつちもよ、カメちゃん!」

『ガメツ!』

自分のからに引き籠る二体。

この場合、音を軽減しているので『うたう』の効果は半減されるのだ。……もちろん、ゲームでは関係ないけどね。

ルビーは、自分の作戦が見破られたことに、軽く焦りを覚えている様子。

「くつ……『うたう』が効いていない……!」

「作戦的には良かったんだけどねえ……ま、相手が悪かったかな?」

「なら、次はあたしが! とろろ、はっぱカッター!」

「トロピウス!」

「へえ、次は相性で攻めてきたわね」

ブルーが冷静に分析する。
確かに、水タイプであるカメックスには、草が有効だ。しかも全体攻撃であるはっぱカッターを使ってきたのも、流石と言っべきだろう。

「ガメツ！」

「ガアメ……」

「カメちゃん！？」

「かめつち、頑張れ！」

かめつち達がはっぱカッターをモロに喰らう。あー、ちょっとま
ずいなあ……。

チラリと隣を見ると、ブルーもこちらを見ていた。どうやら、考
えていることは同じようだ。

さて、反撃開始といきますか！

「戻れ、かめつち！」

「お疲れ様、カメちゃん」

「！？ カメックスを戻した……？」

「どうして！？ まだ全然ダメージは受けていないはずなのに！」

予想外の行動に動揺する二人。

ま、こつちにも作戦ってものがありますんでね。

「いけつ、ドガくん！」

「ピツくん、Lead y Go！」

マタドガスとピクシーのコンビがフィールドに登場。

いつも思うけど、この二匹を使ってるトレーナーって少ないよな

あ……。

「怯んじゃダメだ！　COCO、かげぶんしんからの相手のマタドガスにだましようちー！」

「エネツ！」

エネコロロが分身と共にドガくんへと襲い掛かる。

だましようちは必中技のために、ドガくんは避けられずにそれを喰らってしまった。

「マータドガッ！」

「ドガくん！　体勢を立て直してえんまく！　それからどくどく！」

「マータドガス！　マア〜」

ドガくんが辺り一帯にえんまくを張った。ああ、某コジロウさんのマタドガスを思い出すなあ。

えんまくの影響により、エネコロロはドガくんを見失ったようだ。それに、どくどくを浴びたせいで猛毒状態になっている。

よし。んじゃ、そろそろトドメと行きますか！

「ブルー！」

「オツケー！　ピツくん、トロピウスを引き付けつつ、ちいさくなる！」

「くっ！　でも、そんなのじゃあたしのとろろは」

「いっけえ！　だいはくはっ！ー！」

『えっ！？』

二人が驚愕の表情を見せる。

まあ、この世界じゃ、『だいはくはっ』を使うトレーナーなんて

滅多にいないしなあ……ポケモンが傷つくから。

ドガくんのだいはくはつで、相手のポケモンは一撃で葬り去られた。勿論、ピックくんは回避率を上げたので、大爆発を避けております。

「COOCO!」

「とろろ!?!」

「はい、とりあえずその二体は戦闘不能だからとつととボールに戻してねー」

そのままだと苦しむだけなので。

ブルーは、二人に軽い説明をしていた。

「二人とも、戦い方は良いわ。まず相手の動きを止めて弱点を突く。確かに、セオリー通りのバトルをしていると思う。でも、貴方たちには観察力が足りていない。相手がマタドガスを出してきた時点で『だいはくはつ』を警戒しておくべきだし、最初のカメックスコンビのときも、せっかくトロピウスが出ているのだから、エネコロコは『てだすけ』をするべきだった。見た感じ、そのエネコロコは卵から育てているんでしょう？ だったら、自分たちのポケモンにできる、最善の策をとるべきよ。……わかったかしら？」

『……はい』

「そんなに落ち込む必要もないぞ？ 今のブルーの説明は、あくまで傍から見ているの言葉なんだし、お前たちはまだ初心者だ。技術的なことはこれから学んでいけばいいんだからな」

『……わかりました!』

目に見えて明るくなる二人。

うむ、やっぱりポケモンバトルのときは笑顔が一番!

「今の流れだと私が悪人みたいじゃない……」
「気のせいだよ……」

第三話 VSルビィ&サファイア？（後書き）

感想、お待ちしております。

第三話 VSルビー&サファイア？（前書き）

長らくお待たせしました！ 本当にごめんなさい！ これからも暇があるときはしっかりと書いていきたいと思っています！

ちなみに、作者のモチベーション向上になりますので、感想やご意見などを送ってくれると嬉しいです。

それではお楽しみください！

第三話 VSルビー&サファイア？

「……ありがとう、COCO。ゆっくり休んでね」

「とろろ、お疲れ様」

二人が戦闘不能となったポケモンをボールに戻す。

……おっと、俺もドガくんを戻さなきゃな。

「ナイスな爆発だったよ。今はゆっくり休め」

「マータドガース……」

やりきった、というような表情のドガくんをボールに戻し、俺は今現在の戦況を振り返ってみた。

残りポケモンはこっちが五体に向こうが四体。数的にはこちらが有利だ。それに、実力も勝っている。

それでも、油断は禁物だ。アニメ版のサトシ君だって、レベル5のツタージャに敗北を喫したのだから。

ルビーとサファイアの手持ちがポケスペ通りなら、予想するのは容易。おそらく、いや、確実と言っていいほど、ミスゴロウ系とアチャモ系のパートナーポケモンが残っているだろう。

となると、問題は残りの一匹だ。

まずはルビー。はつきり言っつて、グラエナなら問題ない。ポワルンもまだ持っていないだろうから候補から外させてもらう。

ということは、最後の一体はミロカロスか原作とは違うヤツだ。でもまあ、俺の幼馴染軍団や、ジョウト組の手持ちから考えて、ポケスペと違う、というイレギュラーはないだろう。よってミロカロス。

んで、次はサファイア。なぜか、放し飼いにしてあるハズのトロピウスを持っていたことで、候補が増えた。

最初から所持しているコドラはいい。ドンファンもキンセツシテ
イで手に入れるから除外。だが、困るのは残りの二体だ。

それは、ホエルオーとジーランス。

ホエルオーは体力が並大抵ではないうえに、『しおふき』が使える。万が一『はねる』でもされた日には、いくら攻撃力が皆無だとは言っても確実にやられるだろう。……体重がハンパないし。

ジーランスは、マナフィを除いて、『ダイビング』が使える唯一のポケモンだ。俺自身、この世界でダイビングを見たことがないため、対策の仕様がなない。

さて、一体何を出してくるのか……。

「……よろしく、NANA」

「いつてらっしやい、どららー！」

二人が出したポケモンを見て、俺はこっそり安堵のため息をついた。

よかった……グラエナとコドラか。いらん心配させやがって……。それなら、俺はコイツでいくとしますか。

「いけつ、つぼみん！」

「ウツボツ！」

ハエとりポケモンのウツボツ。特に突出した能力のないコイツだが、戦い方次第、それもことダブルバトルにおいては中々の力を発揮するのだ。……なんか、俺の手持ちってコジロウさんつばいよなあ……今度チリーンでも捕まえようか。

場に出ているポケモンは、あくタイプのグラエナ、はがね・いわタイプのコドラ、ノーマルタイプのピクシー、そして、くさ・どくタイプのウツボツである。

お互いが相手の動きを警戒している中、ルビーが動きを見せた。

「NANA、ピクシーにはかいこうせん！」
「グラッ」

ブルーのピクシーにはかいこうせんが繰り出される。しかし、ちいさくなるで回避率を上げているピクシーには当たるはずもなく空しく地面を陥没させたにすぎなかった。

はかいこうせんの反動によって動けなくなったグラエナ。その隙を俺達が見逃すはずがない。

「つぼみん、グラエナに向かってあまいかおり、それからしびれごなだ！」

「ウツボツトー！！」
「なにっ!？」

あまいかおりで回避率を下げ、しびれごなの麻痺で素早さを最低まで落とす。少なくともこれでグラエナが攻撃を避けられることはなくなっただろう。

ブルーがこちらにウィンクをしてくる。任せろ、という合図だ。俺はつぼみんを退却させ、ピクシーに道を開けさせた。

「よしっ、いくわよピッくん！ かわらわり！」
「ピッ！」

決まった！ あくタイプのグラエナに効果抜群のかくとう技が完璧にグラエナを捉えた。

「グラア……」
「NANA!？」

ルビーの叫び空しく、グラエナはグラッと地に付してしまった。
……グラエナが、グラッと……ぷぷ。

「……アンタ、またしょうもないこと考えているでしょ」
「滅相もございません」

流石は長年の相棒。俺の心の中でさえ完璧に読んでくるとは……
『とあるブルーの心理読解』とでも呼んでやろうか。

「呼ばなくていいわよ、バカ」

「地の文にまで突っ込んでくるのかよ!？」

どうやら彼女のレベルは相当なものらしい。

「……なに、余所見しているんですか!」

と、俺とブルーが漫才しているところにサファイアがコドラを突っ込ませる。

あー、俺のつぼみんには相性が悪すぎるなあ……。……と、いう
ことで。

「つぼみんっ、一時退却だ! ピックんの背後に隠れる!」

「ピックアップはコドラに向かってかわらわり!」

「なっ!？」

退却。これも立派な戦術です。

完璧につぼみんへと狙いを定めていたコドラは、死角から訪れた
ピックアップのかわらわりによって、為す術なく戦闘不能になった。……

……まあ、はがね・いわに対しての格闘タイプだから……。……四倍ダメージは流石に耐えられないだろう。

なんだかんだでハウエン組の残りポケモンはそれぞれ一体。俺達と自分達のあまりの実力差に、無力感を感じているのが傍から見ても丸わかりである。

……さあて、ラストポケモン、楽しもうじゃねえか！

第三話 VSルビー&サファイア？（後書き）

今回は月曜日あたりに更新したいです。

それでは、感想やご意見、ポケモンの雑談などお待ちしています

第三話 VSルビー&サファイア？（前書き）

こんにちは。

ホワイトを必死に進めている、ふゆいです。

やっとプクリンが45レベル！ 長かった〜（泣）

みなさん、プクリンにはどんな技がおすすめでしょうか？ 助言待ってます。

そしてやっとハウエン組との戦いもクライマックス。次回からは普通に旅します。

それでは、お楽しみください

第三話 VSルビー&サファイア？

ホウエン組の残りポケモンはそれぞれ一体ずつ。

泣いても笑ってもこれが最後の勝負だ。どんな展開だろうが全力で相手をさせてもらうぜ！

「こ、ここまで圧倒的だなんて……」

「流石はカントーリーグ上位層の二人。実力差が段違いすぎるわ……」

あまりにも一方的な展開に戦意を喪失しかけている二人。無理もない。大したことをできぬまま遂に残り一体まで追い詰められてしまっているのだから。

「……こんな圧倒的不利な状況でも、諦めたりしたら駄目なんだよ！」

俺はつぼみんをボールに戻すと、かめつちのボールを手に取り、無言でボールから出す。隣では俺の考えを理解したブルーがカメちゃんをボールから出していた。

俺達の突然の行動に二人が目丸くして見つめている。

「やれやれ。まったく手のかかる主人公たちだな……」。

「お前ら、なんでそんな弱音吐いているんだ？」

「え……？」

「自分の力が及ばないから。敵が圧倒的過ぎるから。もう勝ち目なんて存在しないから……そんな状況に吞まれてんじゃねえだろうな？ 甘ったれてんじゃねえぞ」

「……………」

俺の言葉にどんどん顔が俯いていくルビーとサファイア。

……やっぱり、まだ自分だけじゃ打開できないか……しゃあねえな。

俺は二人の様子を伺いながらも、現状打破の台詞を口にした。

「……お前らは、どうして自分のパートナーを信じてやらない？」

「……パート、ナー……？」

「あ……」

「お前らが今まで一緒に旅してきた仲間達は、いつだってどんなピンチのときだって、お前らに力を貸してくれたんじゃないのか？」

お前らが諦めない限り、そいつらだって絶対に諦めなかったはずだろっ。」

「……はい」

「……確かに、そうでした」

いくつか思い当たる節があったのだろう。盛んに首を上下に振っている。

「少しだけ回復した様子の二人に俺はニカッと笑顔を浮かべ、大声で言い放ってやった。

「だったら……諦めんなよ！」

『っっ』

「信じるよ、お前らのパートナーを！ たとえ最後の一匹になったとしても、まだお前らには仲間がいるんだろ！？ なあ！？」

「……zuzuz」

「……ちやも」

「お前らはただなんとなくそいつらを貰ったのか？ 別に深い理由もなく、その二匹を託されたのか？ ……違うだろ！ お前らは思ったはずだ。こいつと一緒に生きていこうと。一緒に旅していこうと。……そうだろ？」

『………はい』

「だったら、後は分かるよな？」

質問ではなく確認のような問いかけをする。……さて、そろそろ分かっただろう。

そして次の瞬間。

「頼むよ、zuzu！」

「いつてらっしやい、ちやも！」

同時に、自分のパートナーを場に出したのだ。

やっと理解しやがったな？ 少々時間はかかったみたいだが、それでこそ主人公だよ。

隣のブルーがニヤニヤしながら、二人に向かって言った。

「……さあ、準備は良いわね？」

『はい！』

「いい返事　いくわよ、タケル！」

「おつともさ！」

ブルーの掛け声で戦闘態勢をとる。

緊迫する空気の中、最初に動いたのはハウエン組だった。

「zuzu、タケルさんのカメックスにマッドショット！」

「ちやも！　ブルーさんの方ににどげりよ！」

「又マツ」

「シャモウッ！」

土の塊とワカシャモの脚が俺達のカメックスに飛来する。

そうそう！　そうこなくっちな！

「面白くなってきたぜ！ かめつち、ヌマクローにねっとうだ！」

「カメちゃん！ ワカシャモにアクアテール！」

『ガメツ？』

「くっ！ 頑張れZUZU！」

「負けないで、ちやも！」

俺達の攻撃ををまともに受け、膝をつきそうになる二匹。しかし、そんな二匹を後方から必死に応援するルビーとサファイア。
……そんな感動的な展開の中、変化は訪れた。

突然、二匹の身体が光に包まれたのだ。

「な、なに！？」

「一体、何が……」

呆気にとられる二人。かくいう俺達も、いきなりの事態に軽く戸惑っている。

まさか……こんなタイミングで……。

「ラグラッ！」

「バシャッ？」

ヌマクローとワカシャモは、あまりにも素晴らしすぎるタイミングで、最終形態へと進化を成し遂げてしまったのだ。

感極まっている様子の二人。俺は盛大な拍手と共に歓声を送った。

「すごいじゃないか！ お前ら二人の心が伝わった証拠だよ」

「よかったわね」

「あ……ありがとうございます！」

「うわぁ……これが、バシャーモかぁ……」

さて、準備は整ったな。

俺は全員に聞こえるようなでかい声で、高々と言い放った。

「それじゃ、いつくぜえええええええ？」

『はい？』

「ありがとうございます！」

「ブルーさん達のおかげで、少し強くなれた気がします」

お礼と共に俺達に頭を下げる二人。

結局あのは、カメックスを倒されてしまい、次のポケモンで俺達
が勝利を得た。

やっぱり主人公はのびしろがハンパないな。

「お前達はどうするんだ？」

「僕たちはこれからキンセツシティに向かおうと思います」

「三個目のジムに挑戦しようと思ってるんですよ」

「そっか。それじゃ、これからも二人仲良く旅を楽しめよ？」

「悪の連中も大事だけど、やっぱり旅は面白くなかつちやね」

「はい！ それじゃ、ありがとうございました！」
「また機会があったらどこかでお会いしましょう」

さよなら！ と相変わらずの大声で俺達に別れを告げ、二人はキ
ンセツシティへ向けて走り出していった。

やれやれ、ホウエンについての途端に忙しかったぜ。

「そんなじゃ、俺達も行くとするか？」

「そうね。まずはフエンタウンに行きたいわ。温泉って入ったこと
ないから楽しみなのよねー」

「そうだな。俺も久しぶりに風呂には浸かりたいよ」

こうして、ひとまずの目的地が決定した。

目指すはフエンタウン。ホウエン名物フエン温泉に入る旅の始ま
りだな。

「よし、んじゃ、出発するぞ」

「ええ、早く行きましよう！」

二人並んで110番道路へと足を進める。ホント楽しみだなあ。

……そうして、温泉への期待を胸いっぱいに含めながら、一步を
踏み出したとき。

「あ！ ご主人様見つけ！ やつと見つけたよ〜」

「おい、らていつち！ マスター見つけた途端に加速するなよ！」

突然、上空から聞き覚えのある……というか、明らかに俺の知人
の声が降ってきた。うわ……あいつ、こんなところまで俺を追いか
けてきやがったよ……。

ブルーも声だけでそいつと分かったのか、盛大な溜息をついてい

た。
ちれちれ、フエントウンへの道のりは遠いな……。

第三話 VSルビー&サファイア？（後書き）

感想、ポケモンアドバイス、待ってます

第四話 むげんポケモン（前書き）

おひさしぶりです。

ポケモン更新しました。

なんか実力が落ちてるなあ……。

第四話 むげんポケモン

面倒事なんていうのは無自覚のときに向こうから舞い込んでくるものだ、と俺は心から思っている。

事実、こっちから会いに行こうと思ってもなかなか出会えるものでもないし、かといって「待ってやる！」と言っていれば遭遇できるものでもない。

基本的に来てほしくない時に来るからこそ、面倒事と言われているんだし。望んでいるときに来てしまえばそれは既に面倒事ではなくただのラッキーパターンだ。

そして、そういう願ってもいない時に限って、面倒事に対しての対策が取れなかったりするの、この世の常というものである。

人生は予想ができないから面白い、とどこかの偉い人が言ったが、俺はその言葉を断固否定したいと思う。

確かに、予想が出来なければ次にどういった展開が起こるのか、ワクワクするかもしれない。

しかし、予想外のことが起こるといことは、どんな危険な事態に遭遇してしまったとしても、対処できないということにも繋がるのだ。結果、自分自身のみならず周囲の人間まで危険に巻き込んでしまうかもしれない。そういったことは、何としてでも避けるべきなのである。

……さて、突然長々と説明臭いことを述べてきたが、結局何が言いたいかというと

「じつ主人さまあ

っ？」

あまりに予想外の事態は、ときに自分の身を滅ぼしかねないということだ。

それにしても……、

「いきなり突っ込んでくるか普通！」

「今！ 会いに行きます！」

俺のツッコミを見事に無視して上空五十メートル付近からミサイルのように加速し、明らかに俺の方向へとぶっ飛んでくる赤白の物体。鳥とは違う形質の翼が戦闘機の如く風を切っている。……あ、やべ。思ったより速いわ。

一応の対処策として、出来得る限り射程圏外へと後退を始める。ちなみにブルーは既に脱兎のごとく逃げ出していた。相変わらず行動が早いですね！

しかし、危険に気付いてからの避難なんてたかが知れている。結局、飛行物体は速度を落とすこともなく、俺は俺で射程から逃れることもかなわず、見事なまでのナイスなタイミングで俺の頭上へと飛来したのだった。

「わあ〜い！」

「げぼあっ！」

脳天に走る鈍い痛み。体中を駆け抜ける電流。目の前をパチパチと輝く火花。……っつて、痛い！ タケル君人生史上ベスト3に入るくらいの激痛が身体の節々にまで連鎖してる！

地面に倒れ伏し、悶絶している俺。そんな俺に馬乗りの状態です

りすりと身体を擦り付けている容疑者。

白と赤の羽毛は見た目よりも遙かに柔らかく、なかなか気持ちの良い感覚が俺の腹の上を動き回っている。

未だに痛む頭を抑えながらも、そのまま無視し続けるのは確実に無理であると結論付け、俺は溜息と共にソイツの名を呼んだ。

「……よお、らていつち」

「はあい　ご主人様はいつでもいい匂いだね！　あまりの気持ちよさにアタシは思わずご主人様のお腹の上で襲ってくる眠気に身体を預けてしまつかも！」

「やめてくれ」

とろん、とした瞳で俺を見てくるコイツだが、これでもれっきとした俺の仲間だったりする。……とりあえず、軽く紹介でもしておこう。

むげんポケモンのラティアス。世界中を飛び回っていたり、水の都を守っていたりするあのラティアスだ。

俺とブルーがカントー地方を旅している途中、傷ついたコイツに遭遇したのが俺達の出会い。そのときからなぜか俺に懐いてしまい、なんだかんだで俺の仲間になった。ニックネームは『らていつち』。……そのときもブルーから『アンタって相変わらず独特のネーミングセンスよね』と溜息交じりに言われたのは苦い思い出である。

らていつちは「よいしょ」と身体を起こすと、静かに目を瞑った。

「……ちよつとこの身体じゃ不便だもんね」

ユラリ、とらていつちの身体が霞む。霧のようなものに一瞬包まれた彼女は、次の瞬間には『人間』と全く同じ姿になっていた。……ホント便利だな、コイツの能力。

「えへへー、これで思う存分甘えられるよー」
「いや、その前にどいてくれないか？ 意外と重いんだが」
「もー、そういうこと言っちゃダメなんだよー？ 女の子には優しくって教わらなかつたのー？」
「残念ながらそんな弱い女子は周囲にいなかったもんでな」
「……………それは私に対してのあてつけかしら？ タケル」

ありや、やっと出てきましたな、ブルーさんや。

らていつちのあまりに衝撃的な登場にすっかりと空気になってしまっていたブルーは、軽く嘆息すると未だに俺に引っ付いているらていつちにむけて鋭い視線を送った。……………それにしても、らていつちって随分とスタイルがいいな。身体のおちこちに柔らかいモノがむにむにと押し付けられている。場違いだとは思うが、ごちそうさまです。

らていつちに馬乗り状態で乗られ、全く身動きが取れない俺。そんな状態にもかかわらず、ブルーは額に青筋を浮かべながら、らていつちに話しかけた。

「こら、いい加減に降りなさいよ」

「うわ、ついに出ちゃったんだよ青女」

「誰が青女よ、誰が。アンタってホント揺らがないわよね。いつまでたってもその赤ん坊状態。少しはタケルからの自立を考えた方がいいわよ？」

「へっへーん。別にいいんだよ！ アタシはご主人様に尽くす存在でありご主人様を癒す存在なんだから！ こうやってスキンシップをとることで日ごろの疲れを心と体の両面から癒していくんだよ！」

「何が癒しの存在よ。どう見てもタケルは迷惑しているじゃない」
「違うもん！ ご主人様は嬉しがっているんだよ！」

「どこがよ！ 見なさいそのアンタのマスターを！ どう反応していいか分からずに戸惑っているだけじゃないの！」
「気付いているならどうにかしてくれよ……」

完全に周りが見えていない様子の女子二人は、呆れて溜息をついている俺に気付く素振りも見せない。

いつまでたつても進展しない状況に嘆息していると、不意に後ろかららていっちを制止する声が響いた。

「……ころ。早くタケルさんから降りろよ」

「お、お兄ちゃん……」

「お前も少しは自立心を養えよな。仮にも【マボロシ】の名を冠するポケモンなんだから、最低限のプライドと威厳を持って行動するべきだ。そんなだからお前はいつまでたつてもタケルさんの手持ちに確定されないんだぞ？ まったく」

「あーもうわかったよ！ どけばいいんでしょ、どけば！」

ぱつと勢いよく俺の身体かららていっちが離れる。同時に蘇る俺の自由への感覚。ただいま、フリーダム。

「すみません、タケルさん。ウチの妹がご迷惑をおかけして……」

「あーいいよいよ、気にしてないし。いつものことだからさ」

「……ホントすみません……」

……さて、さっきから頭を下げているこの青年。勘のいい人ならお気づきだろうが、らていっちの兄であるラティオスだ。ちなみに俺のポケモンではない。ラティ兄妹はどちらか片方だけって相場が決まっているしな。

さてこのラティオスだが、ポケモンにしておくには惜しいくらい
の常識人（？）であるため、らていっちが暴走した時にはたびたび

お世話になっっている方なのだ。正になくてはならない存在。劇場版では可哀想だったけどね！。

「で、なんでオマエはここにいるんだ？ らていつち。確かオーキド博士のところに預けたままだと記憶しているんだが」

「そ、そんなの……ご主人様に会いたかったからに決まってるじゃないですかっ」

「……へー、その割には俺にダメージを与え続けていたような気が……」

「あれはアタシなりのスキンジップです！ ポケモンと人間、本来なら主従関係や親友以上の絆が生まれたい残酷な間柄ですが、アタシはポケモンとして初めて人間であるご主人様と真実の愛を育み

」

「「はいそこ黙れ！」」

「きやうっ！」

ブルーとラティオスによる息の合った【爆裂パンチ】がらていつちへと突き刺さる。こうかはばつぐんだ！ きゆうしょにあたった！ ……精神的に。

「お前はまったくいつまでたっても僕に迷惑をかけて……この馬鹿妹が……！」

「痛い痛い痛い！ お兄ちゃんギブギブギブ！ 両脚が交差して関節がおかしな方向にい？」

「……で、タケル。あのバカ娘はどうするのよ」

「どうするって言われてもなあ……今更送り返すわけにもいかないだろ」

ていうか、送り返したところで確実に戻ってくる気がする。いやマジで。現に昔マサラに放置したときも、ジョウト地方まで追っか

けてきやがったからな……どんな行動力だよ、ポケモン。

「このまま連れて行くしかないだろ。幸い手持ちには空きがあるし……いざとなったら【るぎうち】になんとかしてもらおうさ。いつまでもラティオスに頼り切りっていうのもアレだろ？」

「私が言いたいのはそのうちのことじゃないんだけど……まあいいわ。いざとなったら【鉄拳制裁】すればいいだけだしね」

ポケモン愛護団体に捕まるぞ、ブルーさんや。

しかしまあ……なんだかんだで旅の仲間が増えました。

心配事は増える一方だが……とにかく今はフエンの温泉を目指そう。そして最終的にはカイオーガを……ぐふふ。

第四話 むげんポケモン（後書き）

感想、お待ちしております！

第五話 カラクリ屋敷（前書き）

こんにちは。やっとこさカメックスがハイドロポンプを覚えまして。長かった……ここまでホント長かった……！

今回は少し短めかな？

それではお楽しみください。

第五話 カラクリ屋敷

「はあっ……はあっ……」

現在俺は追われている。

必死に息を切らしながら先へ進むために足を動かし続ける。追手から逃げるために。自らを助けるために。

「くそっ……仲間も随分とやられちまつてるし……」

そう愚痴りながら腰に付けているモンスターボールを一瞥する。赤と白で色分けされたボールの中では、何匹かのポケモンがグルグルと目を回した状態で【瀕死】になっていた。やべえ……早くポケモンセンターに行かねえと……。

心の中で再度舌打ちをしながらも、俺はできる範囲で後ろを振り向く。うげえ……相変わらず鬼畜的なセンスしてやがる……。

俺の視線の先では、前世で見慣れた形状の棘付鉄球が、俺を追いかけて高速で回転している光景があった
って、

「ノンビリ状況解説している場合じゃねえ
っ？」

すでに限界を迎えているであろう脚をさらに加速させていく。その姿、まさにウィンディの如く。

【しんそく！】……今だけは【しんそく】が欲しい！

……………カタン

と、逃げている最中の俺の耳に、世にも不吉な物音が届いてきた。え？ 『カタン』って……………？

スピードは緩めないまま、恐る恐る後ろを振り向く。絶対に振り返ってはいけないとわかっているのに、無意識のうちに身体がそっやっって動いていく。

そんな心の葛藤を続ける俺の双眸に飛び込んできたのは……………

「……………ジジジ……………ジギジギジジ……………」
「ツブテツ？」

何匹も連なるレアコイルと、集団になって追いかけてくるイシツブテの大群だった。

な、なんでよりもよってこのチョイス？ 意味が分からないのだが……………。

意味不明の状況に疑問符を浮かべていると、目の前のポケモンたちが唐突に動き出した。レアコイルが三体のコイルに別れ、俺の周囲を取り囲んでいく。しばらくして、磁場のようなものが俺の身体に発生し始めた。どうやら、彼らの磁力で俺を鉄球の方に引き付けていく算段らしい。しかもトドメとばかりに、鉄球の傍ではイシツブテ達が【じばく】の準備に入っている。だんだんと赤みを帯びていつているのは、おそらく自爆による高温の熱によるものである。あんなに真っ赤になるまで上昇した温度の爆発喰らったら、ひとたまりもないだろうなあ。

「……………じ、「冗談じゃねえぞ！ 死んでたまるかあ

」？」

あれはマジでマズイって！ 物理防御が最低ランクの人間に耐えられるようなやわっちいものじゃねえ！

せわしなく両脚を動かしていくが、レアコイルの磁場の影響でなかなか前に進めない。それどころか、どんどん鉄球に近づいて行っているようにも思われる。このままじゃ……よくて爆死だナッ

「もう……無理か……」

そろそろ脚が限界になってきた。これ以上は、どう足掻いても動かせそうにない。

俺はいよいよ決意を固める。

タツと立ち止まると、鉄球の方を振り向き元気よく言い放った。

「さあ来い鉄くず！ 俺が全力でお前を受け止めてやぶるげあ？」

想像以上の痛みに、俺は一瞬で目の前が真っ暗になった。

『また次回、お越しくださいます。よわっちいチャレンジャーさん』
「ぐはっ」

気が付くと、俺は地面に叩きつけられていた。予想外の痛みに蹲る俺を嘲笑うかのように、目の前の珍妙な屋敷からアナウンスが聞こえてくる。その声はどこか機械的で、それでいて侮蔑と嘲笑の混ざった不思議な声だった。建造物のくせに……建造物のくせに？

「あゝらら、やっぱりリタイアしちゃったのね。ドンマイドンマイ」

ボロ雑巾のように転がっている俺に対してそんな辛辣な言葉をかけてくるような人物は、俺の知り合いにはあいにく一人しか心当たりがない。

俺は傷ついた身体を庇いつつも、目の前でへらへら笑っている幼馴染に視線を向けた。

「ブルー……お前もうちょっと、こう、気の利いたセリフを言えないのか？ 愛しい幼馴染がボロボロになって野垂れてるんだぞ？」

「だっていつものことだし。カントー地方じゃサカキ相手に病院送りにされてたじゃないの。それなのに、今更そんな怪我を見せつけられてもねえ」

「くっ……俺ってそんなに貧弱だったのか……」

思えば今までの十六年間で、結構な数大怪我をしているような気がする。小さい頃、親父から貰ったドガスと一緒にトキワの森に遊びに行った時も、スピーアの毒針にやられて搬送されたし。旅に出始めてからも、オツキミ山で岩雪崩に巻き込まれるわ、サイクリングロードで自転車のブレーキが壊れて壁に激突するわ、サファリゾーンで遭難した拳銃ニドキングに追いかけてまわされるわ……俺の人生波乱万丈すぎじゃね？ もうちょっと落ち着いた旅をしたいと思うのは当然だろうと思う今日この頃。

「アンタってホント脇役気質よね。ギャグ補正とアンラッキーで構成されていると言われても一切不思議じゃないくらいに」

「そこまで言うか！ た、確かに怪我の頻度は凄いいけれども……某上条さんほどではない！」

「誰よそれ」

ふう、パロディネタが通じないというのはなかなか辛いすな。誰かもう一人でいいから転生者カムオン。

「……それで？ どうだったのよ、カラクリ屋敷は」

「もう無理。リーグ準優勝のポケモンがことごとく戦闘不能にされていくんだぜ？ どんだけ鬼畜なんだよ。もう無理ゲーだって」

「ふうん……やっぱり、噂は本当だったのね」

うんうんと頷きながら納得するブルー。いや、だから思考する前に傷薬をください。

さて、今彼女の口から出た『噂』という言葉。これはつい昨日、カイナシティに住む市民の方々から聞かされたものだ。

なんでも、『カイナシティのはずれには、とある奇妙な外観の屋敷があつて、そこでは腕つぶしに自信のあるトレーナーを募集している。しかし、そこでやらされる試練を乗り越えた者は未だ存在せず、突破した暁にはとても豪華な賞品が貰える』……ということ。

この噂に、俺とブルーは目を輝かせた。

基本貧乏性な俺達にとって、賞品という言葉は憧れにも近い。なんとって、無料で物が貰えるのだ。これ以上良いことなんてないだろう？

しかも、互いにリーグ上位に位置する俺達は、バトルの腕にも多少ながら自信がある。こんな町はずれのおっさんが開いたようなアトラクション、突破できないわけがない。ゲームではわけの分からない屋敷だったが、現実ではそうはいかないぜ。一瞬でコンプリー

トしてやる。

そう意気込み、意気揚々と門をくぐった俺だったのだが……

「思いのほかボコボコにされて、為す術なくリタイアしたと」

「モノローグに入ってくるなよ、ブルー」

まあ実際その通りなんですけどね……。

だいたいなんだよあの鉄球！ 一つのドラ○エだつての！ しかもレアコイルは磁力総動員してくるし……人間の力で抵抗出来るかい？

「でも、一等の賞品は欲しいよねえ」

「それは……まあな」

ここカラクリ屋敷の賞品にはいくつか種類があつて、達成速度と点数に応じて上等なものが貰えるという仕組みだ。屋敷前に建てられている看板によると、

【五等：キズぐすり】

【四等：フエンせんべい】

【三等：月の石】

【二等：メタルコート】

【一等：マスターボール】

「このラインナップは凄まじいな。三等以上ならマジで欲しい」

「月の石でプリンは進化するからね」

「そうなんだよなあ……オツキミ山では結局採れなかったんだっけ」

確かイワークとイシツブテに襲われて、採取できなかった気がする。

「しかし……この突破はなかなか難しい気がするな」

「ん？ 一度失敗した人はちよつとばかり冷静にでもなったの？」

「ああ。まっすぐ突っ込んでも振り返り討ちになるってことは分かった。こつなったら俺の全力で突っ切るしかねえ」

伝説ポケモン使用不可とは書かれてないもんなあ……！

「……………リーグ上位者としてはあるまじき行為ね」

「いいんだよ。伝説嫌いなんでバトルの言い訳だ」

ということで、ポケモンセンターに急げ！

第五話 カラクリ屋敷（後書き）

感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9430s/>

俺とブルーとポケモンと。

2011年12月17日11時53分発行